

## 基調講演

# 「これからの大学教育が育てるべき人間像」

兵庫教育大学 学長・中央教育審議会副会長 梶田 勲一

ただいまご紹介いただきました、梶田でございます。いま、田中センター長、電通育英会の松本理事長、そして溝上さんのお話を聞いていて、これはとても大事な会だなと思ってここに立たせていただきました。同時に、私は十年くらい前まで、このセンターの前身である高等教育教授システム開発センターにおりましたので、ああそうだ、これからはこういうことをもっと前に推し進めていかなければならないな、と改めて思った次第です。

いま私も大学におります。新しい時代に向けて、いろいろな改革を大学でもやりました。教員組織も変えましたし、カリキュラムも大きく変えましたし、事務局の組織まで変えました。しかし大事なものは、学生です。学生の実際の姿をきちっとふまえない限り、改革だとか改善だとか変革だとかいっても、全部宙に浮いた話になります。エビデンスベースド、という言い方があって、これは特に 90 年代終わりからの流行ですが、まさにそのエビデンスベースドでいかなければならない。大学教育の場合、一番大事になるエビデンスは、学生そのものだろう、ということの思いながら、お 3 方のお話をうかがい、そして司会の大塚先生が色々とお話になるのを聞いておりました。

実は大学生の実態調査は、私が京都大学にいたときにもやりました。10 年前のことですが、そのときも溝上さんが中心になってやったんです。大学関係の方は、それぞれの大学の図書館に行かれますと、そのときのかかなり分厚い調査報告書があると思います。1997 年に 2 冊出ています。

1 つは京都大学全学共通教育レビュー委員会、この委員会の下に置かれた調査小委員会の責任者を私がやったのですが、ここから出した『京都大学の教育と学生生活—4 回生の意見—』という報告書です。これは 1997 年の 5 月に出ています。京都大学の 4 回生を対象にしっかり調査をやったものです。とても印象的だったのは、毎月・毎週に決まって読む雑誌は何ですか、という設問の回答のどんとつトップがジャンプ、スピリッツ、マガジンだったことです。今はもうジャンプ、スピリッツ、マガジンも下火ですから少し変わっているでしょうが。

私は 1960 年に大学に入りまして、京都大学のこのキャンパスで学生生活を送ったんですが、当時みんなが読んでいたのはアサヒジャーナルでした。もう廃刊になりましたけど。これを読まなければ学生じゃなかったんです。えらい変わり様だ、というのが率直な感想でした。この同じキャンパスで、アサヒジャーナルからジャンプ、スピリッツ、マガジンへ、学生の知的な刺激の素がどれほど変わってきているのか、ということです。

私は田舎の生まれ、田舎の育ちです。山陰の米子という街で、実は田中毎実センター長と同じ幼稚園、高校の出身なんですけど、この米子で幼小中高出ました。

それで京都に来ましたら、わけの分からないことを学生達が、つまり同級生達が言っているのを今でも覚えております。私は文学部 4 組というところに入りました。当時は現役が文学部の場合は 3 割、1 浪が 3 割、2 浪が 3 割、それ以上が 1 割、とよく言われていました。私は間違って現役で入りましたから、年上の人が多かったんです。入学したばかりの頃だったと思います。講義の前か何かの時間に、2 浪くらいの同級生が私の方に近づいて来られまして、「梶田くん、君はサルトルとカミュの論争についてどういう風に考えてい

ますか」と静かにおっしゃったんです。驚きました。「サルトル、そういえば聞いたことがあったような、カミュ、確か作家でおいりましたよね」という感じでした。それで、「サルトルとカミュの論争というのがあったんですか」と聞いたんですが、スッと向こうの方に行ってしまうされました。そして、卒業するまでその人は二度と私に声をかけてくれませんでした(笑)。でも、私も当時は一生懸命背伸びしました。何も知らなかったわけですからね。本当に背伸びしていたなあ、という思いを持っています。

ところが、その 97 年に出した調査報告書の中で、学生がよく読んでいる本というと、まともな本がないんです。当時、教育学部にいらした竹内洋先生とそういう話をしていたら、「90 年代後半の京都大学の学生は難しいことを、つまりサルトルとかカミュとかいうことを、間違っても言うてはいけない。ポストモダンなんていう言葉も禁句だ。哲学とか思想とかフランス文学とか、そういう本を持ってキャンパスを歩くのもタブーだ」とおっしゃるのです。そういう難しいことを口にしたり、難しい本を小脇に抱えている学生は「イカキョー」と呼ばれるんだそうです。「いかにも京大生」ということです。これは侮蔑の言葉なんだそうです。

この 4 回生調査は、各学部から委員を出してもらって、取りまとめを私が責任者としてやったものでしたが、世の中というのは本当に変わるものだな、というのがそのときの印象です。同じ大学生といっても、私が大学生だった頃と、そして私が大学の先生として来た頃と、こんなに違うのかという感じです。ちなみに、この 4 回生についての調査は京都大学として初めての試みだったようです。

1997 年 3 月にも報告書が出ております。これは今回のフォーラムを主催している京都大学高等教育研究開発推進センターの前身である高等教育教授システム開発センターがやったものです。4 つの学部の卒業生を 10 年毎に抽出して郵送調査を行ったものです。文学部・法学部・医学部・工学部の 4 学部を 93 年度、83 年度、73 年度、63 年度、53 年度に卒業された人々を調査したわけです。各学年 500~600 人に郵送調査をするという、かなり大々的なものを行いました。このときもどこかが援助してくださったはずですが、電通育英会のような良いところが多分あったんだと思うんです。なかなか大学の資金ではできませんから。

この報告書は、京都大学高等教育教授システム開発センターから『京都大学卒業生の意識調査—京都大学で受けた教育の評価と人生観』ということで 97 年 3 月に出ています。これもみなさんの大学の図書館で、うまくいけば発掘できるかもしれません。

もし何もないようでしたら、本屋さんに行かれますと、ちょうど 2000 年に私が有斐閣から出した『新しい大学教育を創る』という本があります。これは私の本としては本当に売れなかった本です(笑)。自慢じゃないですけど、私は 1 万部以上売れた本が 20 数冊あるんですが、これは初版そのままだと思います。全然人気がないわけですが、ともかく、この中に主要なデータを入れておりますので、必要があればこれもお読みください。立ち読みで結構です。お買い求めください、とは言いません。

さて、この中で非常に印象に残っているのはどういうことかといえますと、10 年毎の卒業生に調査をしたわけですが、年度が新しくなるにしたがって、京都大学での教育に対する満足度が高まっているんです。何となく、私は逆じゃないかと思っていました。「昔は良かった」とみんな思いたいわけですから。私なども、昔は良かったと昔話ばかりするようになっていきますね。心理的にはどうしても、卒業して時間が経てば経つほど、昔の大学生活のことを美化したくなりますよね。だから、例えば 1953 年に卒業された人が一番「知的な刺激を受けた」とか、「京都大学の教育に満足している」と言いそうだなと思っていたら、逆だったんです。

これに加えて、約 3 分の 2 が「京都大学の教育にとっても満足している」とか「やや満足している」と答えていて、満足している人が多かった、というのも「本当かな?」と思いました。京都大学というのは、今もそうじゃないかと思いますが出席を取りませんし、重複履修といって同じ時間にいくつも登録していいんです。つ

まり、とても効率的に単位が取れる仕組みが出来ているんです。私もそれで救われて卒業したのですが、ほとんど授業には出ませんでした。そんなことを言うのも何ですけれども。私自身のことを言うと、私は6年間、マスターまでいたのですが、ほとんど役に立つ講義や演習はなかったと思っています。あくまで私の場合は、ですが。したがって、とても不幸な学生生活をしました。ということで、学部のとときも大学院のとときも、同志を募ってずっと勉強会をやっていたんです。いくつもやっていました。私は一応心理学をやったことになっていますけど、その心理学は教室で先生から学んだ心理学ではありません。仲間と一緒に、次々に色々な本を読んだ、そういう心理学です。

私はマスターを修了してから東京で仕事に就いたのですが、東京に行ってよく聞かれたのは、「あなたの恩師は誰か」とか「あなたは誰について心理学をやったのか」ということでした。しかし、私には恩師はいないんです。誰にもついてません。私がやってきた自己意識の心理学、アイデンティティだとか自己意識の問題は、当時は心理学の世界ではタブーだったからです。心理学ではない、ともいわれていましたから。私はそれがやりたくて入ったんですけれども、誰も指導もしてくれない、ということでした。

それでも、ちゃんとそれで博士号をもらいました。『心理学研究』とか、『ジャパニーズサイコロジカル・リサーチ』という日本心理学会が出している雑誌に3~4つほど論文を出しましたら通りまして、そうしたら昔の先生が「博士論文にして出さないか」と声をかけてくださいました。それで論文を出したんです。

ただ、1970年の頃で、大学が占拠されていました。それで、博士論文を出してから3年後くらいに、占拠が解けたときに「試問がある」とご連絡をいただきました。行ってみたら、社会学の教授と哲学の教授と心理学の教授が3人おられました。

私の博士論文は『自己意識の社会心理学的研究』というんですけれども、まあ今から考えればつまらないものです。それを書き直したものは、東大出版会のUP選書から『自己意識の心理学』というタイトルで出ております。これは80年に出して88年に改訂して、いまだに大きな書店の心理学の棚にあったりします。それはさておきですが、関心がある人は、これも本屋さんで立ち読みしてみてください。

ともかく、試問をやるととても面白かったのは、哲学の先生も社会学の先生も心理学の先生も、誰も私の博士論文を読んでいないということがよく分かったということです。これはとてもよかったですね(笑)。私は一生懸命に、何を言われたらどう答えようという準備をしていたのですが、全然読んでいないようなので、作戦を変えました。先生方に何か聞かれるんですけれども、みんな的外れなものですから、もう答えるのを止めまして、「そうですか、社会学ではそういうことが問題になっておりますか。勉強したいと思います。ここでちょっと教えてくださいませんか」というと、社会学の先生が喜んでいろいろ話してください。「この点について哲学では」というと、哲学の先生がいろいろ話してください。「心理学では」というと心理学の先生が。どうせ的外れですし、試問というのは通ればいいんですから(笑)。

ともかく私は、そういう形で京都大学での学生生活を送り、そういう形で、論文審査を受けました。そういう意味では私は論文博士なわけですが、この博士号もあまり誇れるような形で貰ったとは思っておりません。ということで、話を元に戻します。

とにかく、卒業生の調査で、「満足している」とか「知的な刺激がある」という回答が3分の2以上、というのは私にとって驚きでした。幸せな学生生活を送った人もいたのか、と。多分、私の学生の頃から比べると、ちゃんとしてきたのでしょう。だから、年次を追うごとに満足感が増え、知的な刺激が増えている。でもまだ数値としてはまあまあの段階に留まっていると言っているいいかも知れません。

ということで、96年からこの京都大学でもFDを始めました。そのときも私はセンターにおりましたから、お世話役をしました。第一回目は比叡山のホテルでやりました。誰も参加しようとはしないので総長お手元の高級洋酒をいっぱい準備するから、と言って誘ったり(笑)、総長が各学部長に「すまんけど何人出してく

れ」と頭を下げたり。それで第一回目をやり、続けて 97 年、98 年とやりました。

私自身は先ほども申し上げましたように、あまり幸せな学生生活ではなかったと思っています。他の面では面白かったけれども、少なくとも、専門の勉強をするという意味では、ここで幸せな学生生活を送ったと思っ

いま、これまで私のかかわった大学生調査の結果の一端について申し上げました。特に卒業生調査は、溝上さんが中心になっておやりいただいたものです。そして同時に今回も、まだ十分にチェックしておりませんが、非常に良い大学生調査をされたな、と思っております。こういうものを積み重ねていかなければいけないのです。それで、色々とクロスしなければならない。こういうことをすることで、教育ということは実が上がっていくと思うんです。どんなに良いカリキュラムを準備しても、どんなに良い指導のための準備をしたとしても、あるいは教材を準備したとしても、噛み合わなければどうにもなりません。「人を見て法を説け」とも言われます。相手の実態に応じて、何をどういうふうに話をしたらピンと来るか、ということを考えなくてはならないのです。相手がピンと来なければ、何を言っても虚しい話です。そのことを、これからの大学教育ではもっと考えていかなければいけないな、と思います。

これは、幼小中高でも同じことです。幼小中については、3 月 26 日付けで新しい学習指導要領、幼稚園の場合は教育要領ですが、これを告示しました。高校は 12 月に発表します。土台になっているのが、1 月 17 日に出した中教審答申です。どういう教育をやっていくかというもので、幼稚園では、小学校では、中学校では、高校では、ということをして出しております。これは私が取りまとめ責任者をやりました。教育課程部会というところで 3 年間議論をしてまとめ、それを最後に小中分科会です承していただきました。両方の長を私がやっています。その上で、総会で 30 分です承していただき、山崎会長が大臣に提出したというわけ

特に小中高では、90 年代から 00 年代に入ってもしばらく、大体 15 年間くらいは、相手である子供と噛み合うかどうかを考えないで、「ゆとり教育」という名前の下に独りよがりの教育がやられて来

ました。子供は素晴らしい可能性を持っているから、子供に任せて、子供の好きなようにやらせよう、と言われてきました。好きなことを好きなときに好きなようにやらせれば、子供は伸びる、といわれ続けてきたわけ。しかし、それで本当によければ学校はいらないし、先生もいりません。当時は文部省の人も教育委員会の人も、あるいは教育学者も、「指導しちやいけな、支援です」とか、「子供たちの目がキラキラと輝くように」とか言って歩きました。これに対して、よく私は「目がキラキラしていても、分かっていないときは何も分かっていない」と言っていました。当たり前のことですよ。こんなことを言っていたわけですから。90 年代は文部省と私は犬猿の仲だったんです。ところが今はどうしたことか、とても仲良しになりまして。「文部科学省頑張れ！」、と支援する立場になっています。これはもちろん、文部科学省が大きく変わったからですけど

---

90 年はとても大変でした。それで 00 年に、国の教育行政の方向性を変えるということで小淵総理の下に教育改革国民会議が設置されました。小淵さんの亡くなった後は森総理に引き継がれて、26 人の委員と総理大臣、官房長官、文部大臣が同じ丸テーブルについて、総理官邸で 15 回議論をしました。私はおそらく、文部省に反対している側の委員として参加させられたのだらうと思っています。ちゃんと、連合の代表も入っているし、経団連からも出ているし、当時ゆとり教育だなんだと旗振りをして

し、それを批判していた学者も出ている、そういう会でした。

この会で、やっぱりこんな奇麗事を言っていたらどうにもならない、現に学力は大幅に落ちているじゃないか、子供たちが本当に色んな問題行動を出しているじゃないか、ということで議論しました。90年代は「子供中心で」といわれながらも、実は不登校がすごい勢いで増えたんです。こういう子供の実態をみたときに、学力は落ちている、不登校は増えている、あるいは色んな非行も増えている、だけでも指導するな、子供を信頼すればなんとかなる、こんなあほなことを言っていてどうなるんだ、ということも私も繰り返し主張しました。特に2000年8月から企画委員会という運営とまとめに責任を持つ小委員会が牛尾治朗さんを責任者として設置され、木村猛さんや曾野綾子さんなんかと一緒にこういう方向でとりまとめをしました。ということで90年代の教育行政の流れを転換する、という『教育を変える17の提案』という報告が2000年12月に出されたわけです。その後、色々とありましたが、この転換を今回はっきりした形で学習指導要領の改訂としてやれたと思っております。

私はいつも思いますが、教育にかかわる議論はやはりエビデンスベースでなくてはどうにもなりません。色々な問題が出てきているのに、「これでいいんだ」、と言いたがる人はたくさんいます。もう夢を見ているみたいに、「子供を信頼すればいい」といったきれいごとを言いたがるけれども、実際の子供を見ていない。

大学で教育する場合も同じことだと思います。「学生を信頼しましょう」、「もう学生は自立した大人じゃないか、任せたらいい」と。もちろん任せたらいいんだけれども、言わなければならないことは言わなければならない。

私が学長をやっている兵庫教育大学も、それまで色々学生にも教員にも問題がありました。私が行ってからは、学生委員会とハラスメント委員会をきちっとやっていただきまして、毎年、学生にも教員にも処分を出しています。

あまり大きな声では言えませんが、多分来週、教育研究評議会で決定を下して、役員会をやって、教員を一人懲戒解雇します。

ほおっておくと、何でも通用してしまいそうなのが大学なんです。でも、学生についても、教員についても、やっぱりけじめというものをつけないといけない。逆に言うと、けじめをつけないなかで実態が分かってきます。どういうふうに大学の諸活動をやっていたらいいのかということ、観念的に頭の中のきれいな事ではなくて、事実というものに噛み合った形でやっていけるのではないかと、思っております。

さて、これからどういうふうに大学教育で学生を育てていかなければならないのか、ということですが、その前提として、今日の大学生の特徴を語るときに、これだけは考えておかなければならないな、ということも少しだけ申し上げてみたいと思います。

今日の大学生を語るときに、大きく言うと、日本の二十歳前後の若者、という共通の姿にまず着目しなくてはなりません。例えば先ほども少し触れましたが、90年代初頭から、公立の小中学校に行った人はきっちとした指導を受けていない。もちろん私学に行った少数派は別ですが。そういう中で大きく二つの特徴があります。

一つは、学力が非常に低いということです。これはカリキュラムそのものがそうだったせいでもあります。都道府県の名前も位置も覚えなくていいようになっていたんですから。だから、東国原知事があれだけ頑張っている、宮崎県がどこにあるのかわからない高校生が非常に多い。大学生もそうです。あるいは若手の小中の先生と話をすることがよくあるのですが、「私が育ったのは米子という町ですけど、生まれたの

は隣にある松江というところなんです」と言うと、後で何人か来て「そうですか先生は松江生まれでしたか、あの四国の」と言ったりすることがあるのです。「それは松山」、と言うのですがね。今は若手の先生も含めて、地理的な常識が、少なくとも私たちの頃から比べると、本当に欠けています。

国会で、テロ特措法の後のインド洋での日本の海上自衛隊の給油問題が議論されています。パキスタンやアメリカなど、5カ国の軍艦に給油をしているわけですがけれども、この法律の期限が切れるものですから、これをどうするかというのはホットな政治課題になっています。これがあるから、8月の終わりに臨時国会を召集すべきか、9月の終わりにすべきか、と与党の中で意見が割れているわけです。自民党的に言えば、これを一応国会に出して、衆議院で可決して、参議院で否決されて、衆議院でもう一度再可決して、効力を続行させる、ということですよ。公明党は、そんな無理までする必要はない、と言っていますよね。民主党では小沢さんは、給油活動そのものはいいいけれどもあの法律には反対だ、とおっしゃっていますよね。まあ、そういう状況があります。これは、どういうやり方をしても、次の衆議院選挙、総選挙の争点になります。

しかし、若い有権者が、あるいは年寄りもそうかもしれませんが、この話を本当に理解できますか。「インド洋？それはインドの近くでしょうね、インド洋と言うくらいですから」とこうなるでしょうね。どうして日本の海上自衛隊の給油艦が、アメリカやパキスタンの軍艦に給油しているか、みなさんご存じですか。日本では油が余っていますか、原油はこれだけ高騰しているんです。高速道路、本当に車が空き空きになってきましたね。これだけ原油が上がっているときに、ただで給油しているんですよ。

海上自衛隊の給油艦が、パキスタンの軍艦やアメリカの軍艦に給油するのは、そもそもアフガニスタンの対テロ戦争に使うはずでした。しかし、イラクの活動においても使っていた、ということで2年ほど前に問題になりました。でも、いまの若い人たちにパキスタンが、アフガニスタンが、といっても分かりますかね。そりゃあスタンと付くんだから関係あるんでしょう、という感じでしょうね。なんでそんなことをやっているのか、分かりますかね。なんで日本がそれだけの犠牲を払っているのか。このこと自体については、民主党も小沢さんも、基本的に反対はしていない。やり方は色々ある、法律そのものには反対だけど、と言っている。この問題が理解されないままで、選挙のときにどう一票を入れるのでしょうかね。

いまは面白い時代です、ポピュリズムで。小泉さんみたいに、自民党をぶっ壊すぞ、と言ったらみんな喜んでしまって自民党に投票した、という面白い話になったわけですから。訳の分からないままで今は投票している。ありがたいことに、福田さんも小沢さんも人気がないから良いようなものの、人気のある政治家が出てくると、何がなんだかよく分からないまま、郵政民営化のときみたいに「これでいこう」と言って結局は外交から何から全権を委ねることになったわけですよ。これが、このところずっと進んできた政治の在り方です。私が90年代の日本の教育政策に反対してきたのはそういうこともあるのです。無知蒙昧に人々をしておいて、それでいて単一の政治的決断を迫るような手法はファシズムだ、ということです。私はそういうことを色々な場所で言い過ぎたものですから、ある時期、いくつかの新聞で名指しで批判されましたけれども。しかし私は今でもそう思っております。

それで、今の若者です。若者だけではないかもしれませんが、そういう危うさがあります。ちゃんとした勉強をしていない、ちゃんとモノを考えていない、ちゃんとしたビジョンを持っていない。そして、色々なテレビ的な、コマーシャル的なものに流されて、極めて重大な判断までしてしまう。ローマ帝国の最後の頃の、あのパンとサーカスと同じことです。私はそういう危うさを今の二十歳前後の人たちに感じております。その上の年代の人たちにも感じております。もっと言うと、日本のいまの社会全部についてもそう感じております。

なかでも特に、二十歳前後から下の世代はものを知らない。ジャンプ、スピリッツ、マガジンは過ぎましたが、毎日毎日メールを交換し、ブログに没頭してそれで日が暮れる、という感じがあります。

これは、大学生に限らず二十歳前後の若者に共通のものでしょう。そういうなかで、もう一つだけ言っておかなければならないのは、世の中が豊かになって寛容になると、みんなうるさく言わなくなるということです。日本は70年前後から豊かで寛容になりました。どういうことになったかという、何についても、「いいよ、いいよ、それでいいよ」です。ある時期のカウンセリングみたいなものです。少し強く叱ったりしたら「トラウマが」とかいう話になるんです。しかし、しかし、です。トラウマが怖くて恋ができますか、と私どもはよく言ってきました。恋をしたら、必ずトラウマができるわけです。まあ私は残念ながら恋をする前に結婚しちゃって、まだ恋をしたことがないのですが(笑)。

ですが、中三になる私の孫娘なども、見ていると怖いくらいです。小六くらいから、次々に彼氏が変わってきますから。いまでもちゃんといます。でも、トラウマは相手の側にだけ与えているようですので心配していません(笑)。いずれにせよ、「叱ったりしたら子供の心にトラウマが」と恐れて親が何も言わない、先生も何も言わない、世の中が何も言わない。これは困った風潮だと思います。大事なことはトラウマになるくらい、きちっと言っておかなければならない、と私は思います。もちろん、鬱になっているときに強いことを言っはいけません、自殺しますから。でも99%の人は鬱じゃないはずですよ。

ともかく、70年前後からの豊かな生活の中で、誰も耳の痛いことを言わなくなった。特に90年代の小中高で言われたのは、「叱るな」ということでした。そして、「頑張れと言っはいけない！」ということでした。それがずっと続いてきて、二十歳前後の若者たちのメンタリティを作ってきています。それでどうなるかという、自分の内的な衝動がコントロールできない、ということになるのです。人間は誰もが内的衝動を持っています。人間というのは、フロイト的にいえば、欲求欲望の塊です。ただそれを、少しずつ少しずつ、自分なりにコントロールする力をつけていく。自己統制力です。これを現実世界と適格的にやっっていくために必要となるのが現実検証能力です。世の中ってどうなっているか、あるいは色んな仕組みがどうなっているか、という自分で自分をコントロールするようになる。同時に、自分なりの価値観を持つようになる。自分は何を大事にしなければならぬか、という価値観を育てていって、この価値観を超自我といいますけど、それとの関連でも自分をコントロールできるようになる。水平軸(現実検証)と垂直軸(価値観)の両方で自分をコントロールできるようになる。これが人間的な発達の色姿です。

好きなことを好きなときに好きなようにやっっているのが一番ハッピーだ、とか、親や教員を含め、外部から叱っはいけない、ということでは自分自身をコントロールする力がかつかないのです。人間として何が大事かというようなことを考えるような場がないままでは、自分自身をコントロールしていく方向が見えないままなのです。

これが90年代から続いてきた豊かな社会、寛容な社会の中で大きくなってきた人たちが親になり先生になり、子供たちに自分勝手な子をやらせてきた今の状況だと思っています。繰り返しますが、嫌われても小うるさいことを言わなければならぬのです。

これは日本のことだけでなく、アメリカもイギリスも70年代に、90年代の日本と同じ様な状況を経験しました。きれいな事ははやりました。それでどうなったかという、1983年に“a nation at risk”、危機に立つ国家、という報告が出されて、これですらと変わったわけです。もう一度、大事なことはお互い大事にし合おう。まずいことを放置しないできちっと手を打とう。学校ではきちっと指導をして、だめを出して、教師の責任、学校の責任ということのを頭に置いた教育をしていこう。こういう方向の転換を打ち出したのです。

ですから、70年代にあれだけ流行ったオープンエデュケーションもが、80年代後半には全く姿を消すわけです。オルタナティブスクールもほとんどなくなるわけです。日本では90年代になって、新しい教育はオープンスクールなんです、などと言っ歩いて歩いた恥ずかしい教育学者がたくさんいましたけれども、それはアメリカではもう廃っしまっていた話です。日本には勉強しない教育学者が多いから、黄色くなった本を古

本屋で見つけて、これが新しいことか、と思ったんでしょうね。まあそれはいいのですが。

ともかく、アメリカはレーガン政権、イギリスはサッチャー政権で 180 度変わりました。ニューヨークの街も、70 年代には昼日中でも地下鉄は怖かったものです。もっとも私は怖い街でも好きでしたから、70 年代にはほとんど毎年ニューヨークに行っていました。ブロードウェイは行った事ないですけども、オフ・ブロードウェイとかオフオフ・ブロードウェイとか、素っ裸でオペラをやっているようなところを、よく言えば前衛的なところを、よく覗きに行ったものです。その当時の地下鉄は怖かったですよ、昼間でも。本当に怖い思いも何度もしました。でも、80 年代の後半以降は、夜でも一応ニューヨークの地下鉄に乗れるようになったんです。本当にアメリカの社会は大きく変化しました。日本に比べればまだ犯罪は多いですけど、70 年代とは大きく違います。

こういうことを申し上げましたのは、学力の問題にせよ、あるいは自分自身をコントロールする力の問題にせよ、学生であろうとなかろうと、最近の若い人たちが似困った面が現われている、それは豊か社会、寛容な社会になったために生じた現象ではないか、ということを書いたかったからです。

学力の問題でいえば、高 1 の生徒を対象とする OECD の PISA 調査が話題になりました。OECD ですから世界の経済の強い国の集まりですが、2000 年、2003 年、2006 年と調査があって、いずれも日本は世界の主要国の中でそう大きな顔をできない結果でした。例えば 2003 年、PISA ショックと言われましたが、そのときはフィンランドが抜群でした。2006 年は韓国が 1 位。とにかく、アジアでも近隣諸国はすごくいいのです。

そのほか、70 年代、80 年代、90 年代、と IEA の TIMSS 調査があります。これはユネスコがバックアップしているものですが、約 40 カ国で、小学生中学生の算数・数学と理科の調査を 3 年おきとか 5 年おきとかにやっています。残念ながら日本の子供たちの学力は、落ち続けています。意欲も思考力も落ちていきます。

そうした子供たちがいま大学に来ている、ということを書いてください。つまり、大学生になっていようがいまいが関わりなく、豊かで寛容な社会のネガティブな面が、いまの若者たちに出ているのです。

先日の秋葉原の事件にしても、あるいは、もう 10 年余りになりますけど神戸の A 少年の事件にしても、ある新聞によると、犯人 2 人は同じ時期に小学生中学生時代を送っているということです。つまりあの野放図な 90 年代の、ゆとり教育といわれていた時期、子供を信頼さえすればいいという時期、に育ってきたということです。その尾をずっと引いているのではないかと私は思います。中三の女の子がお父さんを殺すという事件もありました。考えられませんよ。あのニュースがあった晩、私は同じように中三になっている孫娘と「なんでだろうね」と話したんですけども、孫娘も「わからない」と言っていました。私のところは 5 人孫がおりまして、すぐ近くに 2 家族が住んでいます。週に一度は集まっておばあちゃんと一緒に皆が食事をするものですから、うまくいけば私も滑り込んで、会話に入れてもらいます。その晩は、この話でもちきりでした。中三の孫娘は「分からない」と言うので私はお願いをしました。「おじいちゃんだけは殺さんといてや」と（笑）。

結局、内的な衝動性を自分なりにうまく処理できない。そういう人たちが育っています。大学で教えている方々、気をつけてくださいよ。もっとも、私もあまりうまくないんですがね。文部科学省の会合でも、よく切れることがあります。つまり内的衝動性を上手に処理できないままで年を取ってしまった。

それはともかく、もう一度言いますが、豊かで寛容な社会の負の面が、いまの二十歳前後の人たちに顕著な形で出てきている。しかしそれだけではありません。大学生という固有の存在として捉えた時には、少

なくとも3つの面から今の大学生を見なければならぬだろう、と思っております。

一つは、よく言われますが、進学率の上昇です。私が大学に入った1960年の時点では、大学進学率は9%と言われていました。いまやほぼ50%です。とくに、1960年～75年の間に進学率が急上昇するわけです。60年～70年が高度経済成長期です。どんどん豊かになりますから、60年から75年まですごい勢いで進学率が高くなっています。

それが何を意味するかというと、昔なら大学に来なかった多くの若者が大学に来るようになっている、ということです。これは頭に置いてください。だから、「大学生というものは」などと色々な人が言いますが、それはいつの話ですか？と問う必要があるのです。大学生1960とか、大学生2000とか、日付を打たなければなりません。

日付を打って、それぞれの概念について厳密に考えなければならない、と言ったのが、S. I. ハヤカワとかコージブスキーの一般意味論です。General semantics。「概念というのは、日付なり場所なりをきっちり打たないまま、一般化してしまうと、結局はコミュニケーション上の食い違いが出てくる」ということが、岩波から出ているS. I. ハヤカワの『思考と行動における言語』などに述べられています。S. I. ハヤカワというのは日系のカナダ人で、後に大学紛争華やかな時にカリフォルニア大学の総長になりました。学生がデモをしていたら、総長自ら先頭に立ってそのデモ隊に突っ込んでいったという、面白い学者です。それが有名になって上院議員になって、という人ですが、みなさんはあまり知らないかもしれませんね。

元に戻りますと、大学生一般ということではなく、大学生1960、大学生2000、大学生2008、という形で考えなければならない部分があるということです。多くの若者が大学に行くようになったものですから、英語での大学論を見ていただきますと、少なくともアメリカではハイ・エデュケーションと書かないで、ポスト・セカンダリーと書くのが普通になってきています。つまり、今の大学は高校の延長の教育、ということなんです。少なくとも学部教育はそういう感じです。一方の学生だって、特別な思いで大学に来ているわけではありませぬ。みんなが行くからとりあえず来ました、という感じでしょう。したがって、意欲も学力も将来展望もあまり持っていない。就職の時期になって初めて考えましよう、という感じですね。

別の言い方をすると、昔は大学に行くという人は、将来の指導者になるというイメージを自他共に持っていたわけですが、今では、大学に行くというのは職業に就く前の一つのステップでしかないわけです。ですから、この10%から50%への変化、私の個人的にいうと1960年から2008年までの、特に60年から75年の急激な進学率の上昇、というのは、今の学生像を見ていくときの大きなポイントになると思います。

二つめに、1991年の大学設置基準の大綱化以降、色々な大学が出来たことがあります。数日前の新聞に出ていましたが、私立の四年制大学の47%が今年度は定員割れということです。私立の短大でいうと、68%が定員割れといます。国立大学は大丈夫かという、そういうわけにはいきません。国立大学でも、旧帝大は装置産業ですから、先生がだめだろうと何がだめだろうと、たくさんの志願者が来ます。でも、それ以外のところは大変です。特に地方国立総合大学というのは大変なんです。

こういう場でお話するのは語弊があるかもしれませんが、私は、半年くらい前に私立学校の先生方に頼まれてある県に講演に行きました。終わったら県庁の人が待っていて「すみません、30分でも1時間でもいいからお時間を下さい」とおっしゃる。いいですよ、と言ったら県庁の知事室に連れて行かれました。知事さんと地元国立大学の副学長が待っておられ、このままでは地元国立大学は消されてしまう、だから、私を兵庫教育大学の人間としてではなく、中教審の副会長をやっている人間として支援を頼みたい、と。いま知事会としても、地方国立大学の存続のために色々な運動をしているけれども、なかなか大変だ、と

いうことでした。確かに、途方に行けばいくほど実質の倍率が落ちているんです。学部によってはほぼ1倍になっている。特に途方国立大学の工学部はどこも落ちている。それで、このままだと危ないから、ともかく梶田先生頑張ってください、というお話でした。知事さんは、学長と一緒に、財務大臣にも会ったし、文部科学大臣にも会ったし、自民党の誰にも会ったし、というお話を色々されていました。

いま、私学だけでなく、国立も危ないのです。一番危ないのは、国立の教育系単科大学で、まさに存続の危機にあります。いまは運営交付金として一定の額を国が出しているわけですが、それを毎年1%ずつ減らしている状態です。来年は3%減らすという話があります。それから、国立大学全体の財政支出を少しずつ減らすだけでなく、財務省がはっきり言っているのが、重点配分ということです。国際競争力を維持するために旧帝大の理学部工学部医学部を中心にまず分配する、というんです。こういう状況でどこが割を食うか自ずと分かりますよね。まず11ある教育大学と1つの体育大学、この12大学を潰して、ということになりかねません。

今後は、こういうようなことがどんどん進んでいきます。もちろん、私がいる間は兵庫教育大学は絶対に潰れませんよ。色々な手を打ってありますから(笑)。今日はそういう話じゃありませんから言いませんけど。

とにかく、国公立大学どこでも志願倍率が低下していて、全体として言うとほぼ全員入学になっている。定員割れしているところは全員入学どころではなく、もう来てくれただけでありがたい、です。大学訪問しただけでどれだけグッズをくれますか。今はそういう時代です。

さて、そういう中で何が起きてくるか。もはや大学に入る資質などは問うておれません。もっと言うと、この学科はこういうカリキュラムでこういうことをやります、その前提としてこれが理解できるか、これをこなせるか、ということも問うておれません。学生が来てくれただけでありがたい話です。だから現在の大学生というのは、そういう層が厚いと考えておかななくてははいけない。とりあえず、大学には入れてくれますから。ほとんど全員入学に限りなく近くなっているということになると、大学生だったらこれだけのことは分かっている、当然だとか、大学生だったら知的な関心を持っているはずだとか、大学生だったらちゃんと講義の間座ってられるはずだとか考えたら、間違いなのです。

今日は色々な大学から来ておられると思いますが、講義をやって、一時間二十分おしゃべりをさせない、というのは本当に大変なことです。学生の方だって、なんのおことやらさっぱり訳の分からないことばかり聞いている、ということだったりするわけですから。私は在籍が長かったのは大阪大学ですけれども、大阪大学でも大規模な教室の授業ではしゃべる学生がいました。そういうとき私は必ず、「何列目の左から何人目、立て！」と言うんです。で、「出て行け」と言う。私は必ず資料を作って授業をやりますから、「資料は置いていけ！」と言うんです。そういうことを大阪大学ではやっていました。京都大学というのは、遅くに入ってくるし早く出ていくし、そんなことを言っていたら誰もいなくなりますから、どうにもなりませんでしたがね。ノートルダムは良かったです。私は6年間ノートルダムの学長をやりましたが、講義もちゃんと持っていました。これはよかったですね。今の兵庫教育大学も良いです。というのは、先生になりたいというのは生真面目な学生が多いですから。もちろん、授業の最初には、「私が話しているときにお話いただいたら、出てもらいますよ」ということは言います。「場合によっては二度と入ってもらわないことにしますよ」と。でも教育系は生真面目です。やっぱり、単位を取ることがライセンスにも結びつきますから。

でも、今のほとんどの大学生というのは、何をやっているのかよく分からない、義理で座っていなければならない、ということが多いわけですから、大変ですよ。

とにかく、いまの大学は全員入学というような状況で、肩肘張らなくても入れるような状況になってしまっ

ている。そこから出てきている大学生の姿というのがあります。これが二つめです。

三つめには、大学教育の内容の構造変化ということがあります。これも考えておかなければならない。進学率が低かった頃の大学というのは、60年代の前半くらいまでは、やはり何だかんだいっても、私立も国立も含めて、法学部、経済学部、文学部というものが中心だったんです。アカデミックな雰囲気の色濃くありました。

今は大学教育といってもアカデミックでも何でもないので。60年代の後半から工学部がやたらと多くなった。別に工学部だからアカデミックではない、と言っているわけではありません。アカデミックなんていう前に、これはわからないといけない、できるようにならないといけない、というプラクティカルなものがあるわけですから。工学部で、「そもそも」なんていうことばかり言っていたらどうにもなりませんから。

例えば京都大学の文学部には中世哲学の講座というのがありまして、この前まで私の友人の山本耕平さんが教授をしていました。この講座なんて、教授、助教授、助手が揃っていて、学生は2年に一人、などということがよくあったわけですから。実にアカデミックです(笑)。大学院に入るときはギリシャ語かラテン語ができなければいけないわけですから、何年も勉強して待たなければならなかった。私の友人に、京都大学に現役で入って法学部を出て、そのまま就職すればいいのに、何を迷ったのか中世哲学の講座に転学部した人がいます。彼なんか転学部してからは何年もゆっくりしていました。大学院に入ってからゆっくりしましたが。でも、そうした出世間的なアカデミックな雰囲気は、文学部でも薄くなっているのではないのでしょうか。

いつしか大学は工学部中心になり、最近になると福祉とか観光とか色々な学部ができ、もっと最近では不動産取引の専門学科だとかマンガ学科だとかできまして、アカデミックとは縁のない感じが強くなってきました。よく言えば、一つの具体的で実際的な領域について、何か世の中で通用する専門性を付ける、というのが大学教育ということになっています。昔だったら法学部でも経済学部でも文学部でも、かなり広いことを嫌でも勉強せざるをえなかったのですが、これがなくなっています。

こうしたことが、今の学生たちが色々な本を読まないとか、インターネットで目先の情報を集めるのは非常にうまいけれども考えようとはしないとか、そういうこととも関係しているのではないかと思います。

今はレポートを提出させると、同じ文言のものがいっぱい出てくるんですね。みんなインターネットの同じようなところに接続して、そこで出てきた情報をそのまま貼り付けるものですから。アカデミックなことや、そもそも～は、という感覚話と180度違う感覚になっているのです。

大学というものが、大学教育の中身そのものが、変わってしまっています。良い悪いではないですし、昔に戻せという意味でもないですよ。単なるノスタルジアで言っているのでもないですよ。でも同じ大学生といっても、知的好奇心のまま何でもやってみるという昔の大学生と、とりあえず、例えば介護の資格を取らなければならない、そのために4年間でこれだけの単位を揃えて実習をやって、という今の大学生とでは、頭の働かせ方の根本が違って来るだろうと思います。

ここまで、三つのことを申し上げました。一つ目、進学率が上昇したために、昔は大学に来ない人たちが大学生になっている。良い悪いは別です。それを頭に置いて、今の学生の在り方を考えなければならない。二つ目に、ほぼ全員入学できるという状況が広がってきたので、大学生といっても、意欲も資質も将来展望も全くない、そういう学生が大学という場にたくさんいる。それから三つ目に、大学教育の内容そのものが変わってきているので、昔は嫌でもアカデミックな、あるいは広い視野を持つ、あるいはそもそも論をやる、そういうことであったのが、目先の狭い領域についての実際的専門性を身につけるといものになってきて

いる。これらのことを頭に置かなければならない、ということを書き上げました。

ではそういうことを踏まえて、これからの大学教育において何を育てなければならないのか。今日の資料の2ページに、中教審の大学分科会で今議論しております、これからの大学卒業者に期待されるもの、学士力と仮称しておられますけれども、この項目を挙げておきました。これはご覧いただいて、何かのご参考になればと思います。

これについては、実は私自身は、こんなに一律に言っているのか、ということで批判をしているのですけれども。先ほど言ったような意味で大学生といっても多様ですから、こんなことで一律に網をかけることにどんな意味があるのか、ということで批判はしているんです。ただ、いまの何が何だか分からない混沌とした大学生のあり方、ということについて、最低こういうことはできるようにしたいよね、最低こういうことには目覚めさせたいよね、最低こういう力は付けさせたいよね、という目標を立ててみる試みはあっていいのではないかと考えております。ここに示してあるところが、そこまでいかどうか分かりませんし、うなるようにがんじがらめにする、という意味でもありません。しかしそういう一つのビジョンの持ち方の叩き台としては良いのではないかと考えています。

ただ、これを各大学に押し付けられたら、困る。若干そういうニュアンスがあったので、私は色んなところで反対はしておりますが、ただ学士力という形の問い直しをしてみることは良いだろうと考えております。

例えば知識・理解で、多文化・異文化に関する知識。これは大学生だったら持たせたい。それはそうだと思います。それから、人類の文化、社会と自然に関する知識。昔の教養科目みたいなものを思い出しますよね。しかし少し広いものを、高校よりも一歩進んだものをここでは持たせたい。あるいは汎用的技能ということで、コミュニケーション・スキル、数量的スキル、情報リテラシー、論理的思考力、問題解決力、これらも持たせたい。少なくとも、高校まででもこうしたことを言っているわけですから、大学生にもこれは持たせたい。あるいは態度・指向性で、自己管理能力。自らを律していく行動力。これは確かに持たせないと、これからどんどん日本の社会は崩れていきます。これは欲しいですよ。それからチームワーク、リーダーシップ。これは昔から言われてきた。

それから倫理観。この倫理観というのはなかなか難しいですね。これは私どもも、今回の学習指導要領の改訂で、伝統や文化の見直し、ということを書き言いました。やはり、日本の長い歴史の中で大事にされてきた古典というものを、小学校から中学、高校にかけて、その片鱗だけでも子供たちに出会わせよう、ということを書き言ってきました。したがって、これから小学校の教科書全部に古典が入ります。これまでも、指導要領にないものを教科書に入れるということを2003年に始めておりますので、一部の小学校の教科書には百人一首などが入っていたのですが、これからはきちっと、小中高の全部で古典を大事にするということにしました。これは何かというと、古典を通じて、感性のレベルで、やはりこれは美しいよね、醜いよね、とか、これは良いことだよね、これはちょっとなあ、とか、そういうことを自然に感じられるようになるころまで考えていかなければならない、と思います。

本人がそう思っているんだからそれでいいじゃないか、という非常に無責任な言い方があります。いまや、大阪でも兵庫でも、高校生の援助交際というのが当たり前になってしまっていて、新聞ネタにもなくなってしまう。生徒指導の先生が補導して説教をすると、必ず食って掛かるというんですね。「何であんたそんなうるさいことを言うの」と。「私は自分の責任で、自分でよく考えて、これで良いと思ってやっているんだから、なんでそんなことに口を出すの」と。倫理観というものがない社会では、自分の責任で自分の判断でやれば何でもそれでいい、という、非常に薄っぺらな考え方が流行しがちです。戦後日本の教育の中でもそれはよく言われました。しかし、自分の責任だろうと自分の判断だろうと、薄汚いことは薄汚いんです。ま

ずいことはまずいんです。そういうことを、一人ひとりの感性のレベルで実感するということまで持っていくことを、やっぱり考えていかなければならない。これは大学生もそうです。京都大学というのは素晴らしい学生も出ますけど、逮捕される学生もいっぱい出るところですから。こういうことも考えていかなければならない。

それから市民としての社会的責任。これも倫理観と裏腹です。それから生涯学習力、これは言うまでもなく、一生通じて、ということです。

こういったことが今言われております。この辺も叩き台として考えてみていただきたい。こんなことを言ってどうなるの、という批判もあると思うんです。中教審の大学分科会では私もそういう趣旨のことも発言しました。でも、確かに今の大学生の様子を見ていたら、やっぱりこういうことを手がかりにしながら、うちの大学の学生だったらこういうことを期待したいよね、という議論は先生方の間でやっていいんじゃないかな、という気がします。あるいはFDの一つのテーマとして、こういうことがあってもいいんじゃないかな、という気が私はします。そういう意味でここに挙げておきました。

それから、時間が来ましたがもう一つだけ申し上げておきます。私はずっと言ってきましたけれども、小中高大、あるいは生涯学習全体を通じて、人間はどういうふうにも成長発展していかなければならないのか。これには二つの方向軸があって、「我々の世界」を生きる力と、「我的世界」を生きる力。これを一人の人間の中で統合的に育てなければいけないと思っております。

例えば大学生でも、世の中に出て将来ちゃんとやっていけるような力を付けておいて欲しいですよ。 「我々の世界」というのは世の中、社会ということです。例えば、就職をすれば何かしらの役割が出来ます。それをあくまできちっとこなしていけるような、そういう力もつけなければいけないし、そのためのマナーもつけなければならぬ、人との協力の仕方もつけなければいけない。同時に、世の中で自分の役割をきちんと果たしていくんだという責任感を持たなければならぬ。これが「我々の世界」を生きる力です。

しかし、誰もがいつまでも世の中との関わりで生きていくわけではありません。あるいは、世の中との関わりで生きているときでも、自分だけの世界もあるはずで、これが我的世界。自分の命をどう生きるか、自分の人生をどう生きるか、これがあるはずで、これも、大学生のときには再確認しなければならぬでしょう。そうでなければ肩書きや役割ばかりで自分の人生を考えてしまうようなとんでもないことになります。私はそういう人を非常に軽蔑します。大学まで行って知的になったのなら、世の中の役割とか、肩書きとか、あるいは3ナンバーの車に乗っているとか、庭付きの家に住んでいるとか、そういうことを離れた、人間としてもっと大事なことに気付かなければ本当は嘘ですよ。

これは、例えば先ほども言いました古典などを読めばある程度まで育つのではないか、ということもあります。だから広い意味での教養、読書、これが必要になるでしょう。

残念なことに、いま日本の若い人たちには宗教的な古典を読むという風習がないけれども、私の個人的な意見で言いますと、少なくとも歎異抄くらいは読ませたいし、道元の典座教訓くらいは読ませたい。私は法華経が好きですね。あんなイメージ豊かなものはありません。特に地涌の菩薩、地面から菩薩が次々に出現してくるという場面。人のためになることをやって、人が先に救われて、そのために自分は一生を捧げるという。まあ宮沢賢治の世界です。これなんかすばらしいですね。また、私はクリスチャンですから、そういう意味では4つの福音書。イエスの言行録、これも数多くの素晴らしいイメージを含んでいます。そういう人間としての根本的な在り方、生き方の問題に、どこかで関心を持って欲しいな、という個人的な意見を持っています。

これは宗教宗派の問題ではなくて、自分の人生というものをどう凝視していくか、自分の1回しかない命というものをどう生きていくか、ということです。これは、大学生くらいのときにぜひたっって欲しいな、と思うん

です。そうでないと、その後の長い人生を、本当に醜い姿で生きていくことになりかねません。

私はいま中教審ということに出させてもらっています。2000年からは大型の中教審になりましたから、色んな分科会があって、全部で1,000人以上の委員の人がおられます。そしてそれをまとめる総会委員30人の中には知事も2人入っているし、市長も入っていますし、色んな肩書きの立派な人が入っています。肩書きが立派だから良い話ができる、という意味ではないですが。

そういう委員をやっていると、やたらと自分の肩書きや影響力ばかりを誇示する人に会うことがあります。見ていてみともないですね。子供っぽい。芥川龍之介が「何で軍人は勲章ばかりを胸に掲げて喜ぶだろう」というのと同じです。結局自分が一人の人間としてどう生きていくか、ということがないわけです、教育の話をしているはずなのにですね。世の中でどう偉くなるか、といったつまらない話が出てくる。東大系の人に多いですね。口が滑りました(笑)。

指導要領最後の打ち合わせ会で、インナーといいまして、11人ほどでやっていたことがあります。文科省の局長、審議官、課長、室長という4人と、あと教育課程部会の幹部の先生たちですね。それであるとき、誰かの発言で私は腹を立ててしまったのです。時々私は育ちが悪いものですから、腹を立てる癖があるんですけども。それで、偉くなるかそういうのは明治の始めじゃあるまいし、そういう発想がどこかに潜んでいるような教育論は醜くてしょうがない、大体そういうことを言う奴は東大の・・・と話がそれまして、そうするとみんな下向いているんですね。なぜかと言うと、私以外の10人が全部東大卒だったんです。まあそれはいいんですけど(笑)。別にどこの大学を出ようが、ということがあります。

まあともかく、我的世界の話です。肩書きであろうと、どこを卒業したということであろうと、良い成績であったということであろうと、3ナンバーの車に乗っているかどうかということであろうと、それは世の中でやっていくときの約束事ではない。だからどうでもいい、という意味ではないですよ、それはそれで大事なときもあります。しかし、もっと大事なことがある。そういうことも、学生時代くらいは最後にわからせたいな、と思います。あるいは少なくとも先生と学生の間での会話ではそういうことが出てほしいな、と思います。

そういうことも含めて、これからの大学生に望みたいことというのを、それぞれの大学の実態に即してやっていかなければいけない。実態に即してというのは、事実というものを調査など確認しながら、ということです。エビデンスベースで、自分の大学の学生の考え方だとか志向性だとかを確かめていく。それをやっていながら、教育にあたる側、ファカルティメンバーの方は、いまは学生の様子がこうだから、少なくともこの大学を卒業するまでにはこういう点で目覚めて欲しいね、こういう力をつけて欲しいね、これからのためのきっかけ作りを学生時代にして欲しいね、というような話し合いをしていかなければいけないんじゃないかな、と思います。

最後にもう一度繰り返します。私は学士力ということでは言われている、ばさっと網をかけるようなやり方に必ずしも賛成ではありません。ただ、何か手がかりがないと、うちの大学でどうしようか、ということについて考えることがなかなかできません。そういう意味で、こういうこともみなさんまた参考になれば、と思います。

それでは、これで私の話を終わらせていただきます。ありがとうございました。